

〈黄帝と老子〉雑観 第16回

音楽と暦法が出逢うとき宇宙が構成される

『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある (その4)

『黄帝内経』 研究家 松田博公

ツイート 1

いいね! 12

第11回 [王の治身が治国の本である](#)[『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想 \(前編\)](#)第12回 [『黄帝内経』の身体国家論の完成と風化](#)[～『素問』靈蘭秘典論から『靈枢』師伝篇、外揣篇へ](#)[『黄帝内経』と黄老の「治身治国」思想 \(後編\)](#)第13回 [天の聖数が繋ぐ万物感応のネットワーク](#)[『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある \(その1\)](#)第14回 [天数を修める者は三、五に通ずべし](#)[『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある \(その2\)](#)第15回 [五蔵六府はなぜ五蔵六府なのか](#)[『黄帝内経』の謎を解く鍵は数術にある \(その3\)](#)

中国古代人は、早くから音楽という形なきものの不思議な力に魅了されてきた。奏でられれば人々の情動を揺り動かし、鬼神も泣かせては天空にひるがえり消えていくマジカルなパワー。気の思想の深まりとともに、天の気の流動である風はあらゆる音の源であり、人においては呼吸であり声に当たるとされた。そして天の気由来する音楽は天の気と感応し、天帝の心を癒し、地上の王の心身を清静にし、民を養い、国家を安泰にする媒介と考えられていく。周代の歴史書『国語』には音楽の政治的な効用が次のように記載されている。宮廷では瞽官（ごかん）という盲目の音楽家が宇宙と交信するこの技術を取り仕切っていたのである。

「夫れ政は楽に象り、楽は和に従い、和は平に従う。声は以て楽を和し、律は以て声を平らにす。（略）かくの如くにして之が金を鑄、之が石を磨き、之が糸木（しばく）を繋げ、之がほう竹をうがち、之が鼓を節して之を行い、以て八風をしたがわしむ。ここにおいて、気に滞陰なく、また散陽なし。陰陽序次ありて、風雨時に至り、嘉生繁祉し、人民和利して、物備わりて楽成り、上下はなれず、故に楽正という」



■あはきワールド試読キャンペーン

★詳細は>>> [こちら](#)

今週号のPRの部屋はこちら

●訪問マッサージ&訪問鍼灸のお悩み相談会
(2015/6/6)

■ヒューマンワールドのセミナー

●[クリニカルストレッチセミナー](#) (2015/4/19)

●[あはき師のための変形徒手矯正術セミナー](#)
(2015/6/7)

●[ダイエット・アロママッサージセミナー](#) (2015/7/5)

★ヒューマンワールドの本なら→→→→→ [こちら](#)

★ヒューマンワールドのDVDなら→→→→→ [こちら](#)

(政治は音楽のかたちをもって現象し、音楽は楽器が調和しなければならず、調和は音が乱れず平正でなければなりません。五声(五音=宮、商、角、徴(ち)、羽)は音楽を調和させ、十二律は五声を平正にします。(略)かくして金属を鑄て鐘を作り、石を磨いて磬を作り、糸を木にかけて琴瑟とし、ひょうたんと竹に穴をあけて笙や笛を作り、各種の鼓によって長短大小を節し、正しい音楽を奏で、八風の風が順調に吹くようにして、天地は調和します。かくして気のめぐりが順調で陰気の滞積がなく、また陽気の発散もありません。陰陽の気の巡りは秩序を保ち、風雨は時を得て、五穀は繁殖し、人民は平和で幸福を享受し、器物が完備して、音楽が完成し、国王と民の上下が分裂しません。これを音楽が正しく行われていると申します。) (『国語』周語下)



戦国時代 (BC433年ごろ) の曾侯乙墓から出土した編鐘 (中国湖北省博物館所蔵) Wikipediaから

中国各地の戦国時代の王宮の遺跡からは、いくつもの大仕掛けな楽器「編鐘」が発掘されている。研究者たちは、戦国時代 (BC403年～BC221年) の中期までに、「三分損益法」という音律作成法が確立していたとしている。

「三分損益法」は、ギリシャのピタゴラス (BC582年～BC496年) の音律作成法と同じである。藤枝守著『増補・響きの考古学』 (平凡社ライブラリー) がいうように、中間にあるメソポタミア文明の音楽論が東西に伝わったと考えてよいだろう。

「三分損益法」による音律作成法は、文献としては、BC4世紀の『管子』地員、BC239年の『呂氏春秋』古楽、音律、前漢武帝期の『淮南子』天文訓、『史記』律書、後漢の『漢書』律曆志などに記録されている。

『国語』周語下にも、周代に書かれたとは思えないが、記載がある。それは基準音を発する律管を三分割し、2倍ないし4倍してつぎつぎに十二律を作成する方法で、基準となる律管は「黄鐘」と名づけられ、その他の音

★[メディカル求人天国](#)
鍼灸マッサージ師・柔道整復師の求人情報は»» [こちら](#)

■[投稿原稿募集](#)
週刊『あはきワールド』では、研究レポート、論説、症例報告、エッセーなどの投稿原稿を募集しています。

★詳細は»» [こちら](#)

■[ヒューマンワールドのメールマガジン](#)「あはきワールド」は毎週水曜日に配信しています。

★[配信登録は»»](#) [こちら](#)

律も鐘の名で呼ばれていた。

◇音楽は風から生まれ天地のように循環する

『呂氏春秋』音律は、「黄鐘」から十二律が生み出されるさまを次のように描写する。

「黄鐘は林鐘を生じ、林鐘は太簇（たいそう）を生じ、太簇は南呂を生じ、南呂は姑洗（こせん）を生じ、姑洗は応鐘を生じ、応鐘は蕤賓（すいひん）を生じ、蕤賓は大呂（だいにりょ）を生じ、大呂は夷則（いそく）を生じ、夷則は夾鐘（きょうしょう）を生じ、夾鐘は無射（ぶえき）を生じ、無射は仲呂（ちゅうりょ）を生ず。生ずる所を三分し、之れに一分を益して以て上生し、生ずる所を三分し、其の一分を去りて以って下生す。黄鐘、大呂、太簇、夾鐘、姑洗、仲呂、蕤賓を上と為し、林鐘、夷則、南呂、無射、応鐘を下と為す」

『呂氏春秋』音律は、律の音源は春夏秋冬の四季ごとに吹く風だとする考えも述べている。仲冬から孟冬まで1年十二月の天地の風気が、十二の音律を作り出す。1年の天地の気の運行が十二という数で音律と対応させられているのである。

「大聖至理の世には、天地の気、合して風を生ず。日至れば則ち月、其の風を鐘し、以って十二律を生ず。仲冬日短かきこと至れば、則ち黄鐘を生じ、季冬は大呂を生じ、孟春は太簇を生じ、仲春は夾鐘を生じ、季春は姑洗を生じ、孟夏は仲呂を生じ、仲夏日長きこと至れば、則ち蕤賓を生じ、季夏は林鐘を生じ、孟秋は夷則を生じ、仲秋は南呂を生じ、季秋は無射を生じ、孟冬は応鐘を生ず。天地の風気正しければ、則ち十二律定まる」

（大聖人によって至上の政治が行われた世には、天地の気が合して風を生じた。月ごとにしかるべき日があると、その風をあつめ、十二律を生じた。仲冬（十一月）の最も日の短いときには黄鐘を生じ、季冬（十二月）には大呂を生じ、孟春（正月）には太簇を生じ、仲春（二月）には夾鐘を生じ、季春（三月）には姑洗を生じ、孟夏（四月）には仲呂を生じ、仲夏（五月）の最も日の長いときには、蕤賓を生じ、季夏（六月）には林鐘を生じ、孟秋（七月）には夷則を生じ、仲秋（八月）には南呂を生じ、季秋（九月）には無射を生じ、孟冬（十月）には応鐘を生じた。天地の風気が正しければ、十二律が定まるのである。）

ところで、「三分損益法」の操作を十二回繰り返せば十二律が生まれるが、もう一度繰り返して十三回目に作られる律管は、基準とした黄鐘のほぼ二分の一の長さで、一オクターブ高い黄鐘の音律となる。作業は十三回目でもとに回帰する。十二律は、一年十二月の数に合致するだけでなく循環している。「車輪の如く、終わればまた始まる」天地の運動法則に合致しているのである。

この連載で見てきたように、『呂氏春秋』は黄老天道観に準拠して、季節の変遷、国家の盛衰、人体の気血などを洞察し、万物の気は循環するという理法を強く打ちだした「円道」の思想書である。その思考は、「環（たまき）の端なきが如く」「終わりてまた始まる」の言葉とともに『黄帝内経』の経脈論に流れ込んでいる。『呂氏春秋』大楽は、音楽も宇宙も生成変化する仕組みは同じだと、「円道」の摂理を強調する。

「音楽の由（よ）りて来たる所は遠し。度量に生じ、太一に本づく。太一は両儀を出し、両儀、陰陽を出し、陰陽変化して一上一下し、合して章をなす。渾渾沌沌、離るれば則ちまた合し、合すれば則ちまた離る。これを天常と謂う。天地は車輪の如く、終われば則ちまた始まり、極まれば則ちまた反（かえ）り、みな当たらざるなし。日月星辰は、或いは疾（はや）く或いは徐（おもむろ）に、日月は同じからずして、以てその行を盡（つ）くす。四時は代わる代わる興りて、或いは寒く或いは暑く、或いは短く或いは長く、或いは柔らかく或いは剛（こわ）し。万物の出ずる所は、太一に造（はじ）まり陰陽に化す」

（音楽の由来は久しい。十二律は律管の度量 [長さや容積] から生じ、太一 [宇宙の根源。同時に、基準となる黄鐘の音を指す] に基づいている。「太一」は両儀 [天地。同時に、一オクターブ上下の黄鐘の音を指す] を生じ、両儀はそれぞれ陰陽 [奇数 [陽] の音のグループを「律」、偶数 [陰] の音のグループを「呂」とする陰陽十二律をいう] を生じる。陰陽は変化しつつ互いに上下し、合してメロディーを生成する。離れては合し、渾沌として合してはまた離れる。これを天常（宇宙自然の法則）という。天地の運行はまるで車輪のように、終わればまた始まり、極まればまた本に戻り、あらゆる物事、現象でこの摂理に当たっていないものはない。日月星辰は、あるものは速くあるものは遅く、太陽と月の運行は同じではないが、それぞれ周期を守っている。四季はかわるがわる訪れ、あるいは寒くあるいは暑く、[昼夜は] あるいは短くあるいは長く、あるいは穏やかあるいは厳しい [が、おのおの周期を守っている]。万物は、宇宙も音楽も同じく「太一」から出て、陰陽二気によって化生する。）

音楽に心身を委ね、自らを陶冶すれば、天地運行のリズムと一体になり調和した人生を生きられる。四時（四季）の無為自然の巡りを政治や人生のあるべき姿の基準とする黄老天道観の系譜にある

『呂氏春秋』には、四の数が意味ありげに使われ、前代からの遺産



戦国時代（BC433年ごろ）の曾侯乙墓から出土した編鐘

として、天地人や「三

分損益法」の三、五行の五、六律の六などの使用も目立つが、音律と天文を共通の数で繋ぐ際立った細工はまだ乏しい。しかし、律と暦を同じ水準で捉える感覚はすでに生まれていた。

いっぽう、「三分損益」の音楽構成法から登場した「三」および三対二の比率の神聖化は、戦国から漢代へと展開をとげていく。『呂氏春秋』の「黄鍾」は三寸九分であった。『淮南子』天文訓では九寸になる。新釈漢文体系『淮南子』（明治書院）の著者、楠山春樹は、『淮南子』では一寸が九分であったという説を採り、この九寸は八十一分であるとしている。

『史記』律書では「一寸=十分」の立場から八寸一分にしている。両者は同じ長さである。『漢書』律曆志では、九寸である。これら律管の長さは、すべて「三」の倍数九が関係し、「九」が重視されていることが分かる。

音楽もそして暦も天地の気を繋ぎ人の気を繋ぐツールである。それとともに音楽も暦も数を扱っていたので、両者は「融即」的に、親和性のある同種の技術として結びつけられていく。レヴィ・ブリュルが『未開社会の思惟』で報告したようなプリミティブな感応の感覚が文明段階にも存続していきなのが、中国文化の一大特色なのである。

◇八十一分暦は音楽の数から作られた

では、暦の方はどうなっていたのか。戦国中期ごろには、数理的整合性を持った太陰太陽暦が成立していた。それは、基本定数として1太陽年を $365 \cdot 1/4$ 日 (=365.25日) と算出し、1朔望月は $29 \cdot 499/940$ 日 ($\approx 29 \cdot 530851$ 日) とした。365・1/4日なので、四分暦と呼ばれている。この数値によると一年は354日ほどとなり、11日ほど足りない。そこで閏月を、19年間に7回置いた。いわゆる十九年七閏法で、古代ギリシャのメトン周期と同じである。

四分暦の数理は、それ以前の目視観測に基づく「観象授時暦」に比べて合理的であった。戦国の諸侯は競って採用し、魯暦、顓頊（せんぎょく）暦、夏暦、殷暦、周暦、黄帝暦、魏暦、齊暦、趙暦、韓暦、秦暦などさまざまな四分暦が行われた。四分暦の時代には、前代と同様、季節を分割する二、三、四、五、六、十二、二十四などの数が尊重されたことだろう。四分暦の四は、四時の四と感応する天人合一の数だったはずである。

このように、戦国時代中期には、人々は音楽と天文暦法の双方において、数の神秘的な宇宙力を感じ、両者の出逢いの中に宇宙（コスモス）の秩序を直感していたのである。この感覚は、以前からの十干十二支やこの時期に流行した周易、陰陽論、五行論と結びつく。どこでも通用する普遍的で絶対的な音律の数三、六、九、十二は、その他の数術と絡み、天文暦法、政治、文化、医学などあらゆる事象を規定する法則だとされていく。

そのような気運を受けて、前漢中期、武帝は秦帝国以来の四分暦の改暦を命じた。かくして太初元年（BC104年）に完成した「太初暦」には、数を媒介とする天地宇宙教の信念体系が精緻に反映されたのである。

『漢書』律暦志が述べるように、太初暦作成の理念は、「律をもって暦を起す（音楽の数に従い暦を作る）」ことであった。この新暦は、暦の基本定数として1太陽年を $365 \cdot 385 / 1539$ 日（ ≈ 365.250162 日）とし、1朔望月を $29 \cdot 43 / 81$ 日（ ≈ 29.530864 日）とした。後者を踏まえて八十一分暦と呼ばれる。意外にも、この定数は四分暦よりも正確さにおいて劣っていたのである。学者たちは、天文の事実を探究し、より正確な数値を求めよりも、なんとかして定数に「八十一」という呪術的、信仰的な数を組み込もうと心血を注いだのである。

三は「三分損益」の三であり、三の三乗は九であり、九の二乗は八十一である。この数は天地宇宙の永遠の循環を象徴する。時を同じくして『淮南子』や『史記』は「黄鐘」の長さを八十一分にしていた。この八十一を基準値にすれば、音楽と天文暦法の数を一致させることができる。それによって音律と天文暦法の構成に感応する森羅万象の気は、宇宙大に共振共鳴していることが確認できるのである。

川原秀城は『中国の科学思想』（創文社）で、上にみた『呂氏春秋』音律の文章に触れつつ、気思想史の流れの中に太初暦を位置づけている。

「（『呂氏春秋』音律が）陰陽二気の規則正しい離合集散や消息盈虚が、自然のもっとも基本的な構造ないし秩序をつくりあげていると認識し、その認識のもとに気の消長を十二月に配当し、音律と四季の巡りを関連づけたところに、律暦の一体化を可能にした理論的契機が存在するのである。（略）八十一分律暦はそうした「気」の思想の伝統のもとに、（八十一という）具体的な数値を介して律暦の一体性をより強固に理論化したものであり、「気」の思想の一つの優れた発展形態ととらえなければならない」

太初暦は、音楽と天文暦法の数術による統一を実現し、それを軸に学術、道徳を含む諸制度を整備し、古代の理想の政治を復原する意図を持っていた。そのような目論見を研究者たちは「律暦思想」と呼んでいる。前漢末には、「律暦思想」を徹底させ、「三統暦」を作った学者、劉歆（りゅうきん、BC??年—AD23年）が登場する。

劉歆は、前漢王朝を篡奪し、新王朝（AD8年—23年）を建てた王莽（BC45年—AD23年）の御用学者となり、最後は王莽を打倒しようとして失敗し自死する。そのため、儒教の正統史観からは不評で今なお本格的な評伝は書かれていないほどだが、漢代を代表する学者で、後世に大きな影響を残した。しかも、この劉歆は、父親の劉向（りゅうきょう）と共に、このあと述べるように、『黄帝内経』成立史の秘密を知る人なのである。

その意味でも、彼の事績をたどっておこう。

◇天地—陰陽—音律—易—儒学の天人感応宇宙論体系

劉歆によれば、「三統」とは天統、地統、人統を合わせたもので、「天が陽気を施し、地が万物を育て、人が行う紀律」のことである。大漢帝国を運営する理想に燃えた儒者として彼は、暦、気、音律、易、儒学、道徳など中国的精神世界のあらゆる要素を数術で結びつけ、「三統暦」の有機的な構成を組み立てようとした。その内容は、『漢書』律暦志に詳しく記録されている。

「三統暦」では、三分損益法の基準となる律管の長さは九寸である。なぜそうしたのか。

「五声の本は黄鐘の律に生ず。九寸を宮となしてあるいは損しあるいは益し、もって商角微羽を求む。九六あい生ずるは陰陽の応なり」（『漢書』律暦志）

基準の黄鐘を九寸にすれば、黄鐘が生みだす林鐘は六寸となり、三対二の比率は九対六に変換される。「九六あい生ずる」とはその意味である。いっぽう易においては陽の爻を「九」と呼び、陰の爻を「六」と呼ぶ。天地の気の運動と合致する音楽は、「九六の原理」によって周易の陰陽論と対応させられる。加えて劉歆は、儒学の道徳観も数理的な解釈で組み込み、いっそう完璧な天地—陰陽—音律—易—儒学の天人感応宇宙論体系を構築した。律暦志の次のような文章を読むだけで、その構想の複雑さ、壮大さが見てとれるはずである。

「十一月は、易の乾卦の初九〔最初の陽爻〕にあたる。陽気が地下の黄泉から現れて一となり、万物が萌し動いて太陰にあつまる。それゆえ音律の黄鐘は天統にあたり、長さは九寸である。九は中和を極め、万物の根元となるからである。『易』説卦伝に「天の道を立てて、陰と陽という」とある。六月は坤卦の初六（最初の陰爻）にあたり、陰気は太陽に任務を与えられて継ぎ養い化（めぐ）み柔らげ、万物を生長させ、これを未来に茂らせ、種を剛く大きくさせる。ゆえに林鐘は地統にあたり、律長は六寸である。六は陽気の施（めぐ）みを含み、これを六合のうちに茂らせ、剛と柔に形を与える。「地の道を立てて、剛と柔と曰い」（説卦伝）「乾は大始をつかさどり、坤は成物をなす」（繫辭伝上）のである。正月は乾卦の



新王朝の帝王・王莽 Wikipediaから

九二「下から二番目の陽爻」で、陽気が万物に及んで通じ、寅に位して群がり出、人が奉じてこれを成就し、仁をもってこれを養い、義をもってこれを行い、事物におのおのすじみちを得させる。寅は五行の木であり、五常の仁をなし、五声の商である。それゆえ太簇（たいそう）は人統であり、律長は八寸であり、八卦にかたどり、宓戲（ふくぎ）氏が天地に順い、神明に通じ、万物の情に類（たぐい）そわせた所以である。「人の道を立てて、仁と義と曰い」（説卦伝）「天に在っては象（かたち）をなし、地に在っては形を成し」（繫辞伝上）、泰卦の象辞にあるように、「后（きみ）もって天地の道を裁成し、天地の宜を輔相し、もって民を左右す」るのである。これが音律の三つの意味であり、これを三統とする。」（小竹武夫訳『漢書2 表・志上』ちくま学芸文庫を踏まえて訳す）

劉歆は度量衡も音律によって統一した。度量衡は万物を計測する基準であり、生産・流通の基準でもある。その数値が音律の基音「黄鐘」の音程を出す笛（律管）を基礎に決められたのである。

度（長さ）は黄鐘管の長さ九寸を基準とし、量（かさ）はその九寸につめた秬黍（きよしよ、クロキビ）のかさを基準とし、衡（重さ）はそのクロキビの重さとした。長さの単位（度）はクロキビの一粒の幅の長さを一分とし、九十分にすると、黄鐘の音律を出す管の長さ（九寸）にあたるとした。容量の単位（量）は、秬黍が1200粒入る黄鐘の管の容積（810立方分）を一龠（やく）とした。重さの単位（権）は、一龠に入る秬黍1,200粒の重さを12銖（しゆ）とした。

「三統」の「三」を基本数に「黄鐘の九」を論証し、十二律や九十、八十一などの数字が絡む度量衡を導き出したのである。結果を記そう。

度＝分・寸（10分）・尺（10寸）・丈（10尺）・引（10丈）

量＝龠・合（2龠）・升（10合）・斗（10升）・斛（10斗）

権＝銖・両（24銖）・斤（16両）・鈞（30斤）・石（4鈞）

◇劉歆『七略』に『黄帝内経』が名前を現す

劉歆はさらに五行説を三統の別表現と考え、三統説に組み込みこんでいる。儒教の学術体系も、宇宙の元気を体現する「元」に当たる易学が五行に対応する書学・詩学・春秋学・礼学・楽学を統べる編成にした。

なかでも劉歆の五行論への傾倒をよく示しているのが、五行相生法による五徳終始説の提唱である。五徳終始説は、戦国時代の鄒衍に始まるとされる。鄒衍の説は相克説に基づいていた。王朝の徳は土→木→金→火→水の順に交替し、火徳の周王朝を引き継ぐのは水徳の王朝で色は黒だとし、秦帝国の誕生を予言した。前漢建国期には、高祖劉邦は一代で崩壊した秦を徳のある王朝とは認めず、漢は金徳の周を継承する火徳だと主張した。その後、文帝の時には漢は秦の律暦を踏襲したので水徳だとされ、さらに

紆余曲折を経て武帝の「太初改暦」の時に、秦を倒した漢王朝は土徳で色は黄だとする解釈に正式に落ち着いたのである。

劉歆は、五徳は木→火→土→金→水の相生の順で交替すると説き、高祖の主張を取り入れて秦を徳の系列から外し、木徳の周王朝を継ぐ漢王朝は火徳で色は赤であるとした。漢王朝を奪った王莽は、この論理の上に、自らの新を漢から相生的に禪譲を受けて成立した土徳の王朝だとし、黄帝の子孫を宣言した。この解釈がその後、宋まで1000年間、用いられたのである。（漢・火徳説は、王莽の新末に起きた赤眉の乱に受け継がれる。決起した民衆は、漢王朝復興を旗印に火徳を主張し眉を赤く染めて戦った。混乱を收拾し後漢を興した光武帝は火徳を宣言した。後漢末の黄巾の乱は、火徳を土徳で引き継ごうとした道教反乱だったが、相生での奪権は成功せず、魏・呉・蜀三国時代に突入する。）

劉歆は、また前漢王朝が保管していた書物の目録『七略』を編纂している。その最初の「輯略」は序論であり、実質的には以下の六略である。①六芸略（儒教経典）②諸子略（諸子百家の書）③詩賦略（文学作品）④兵書略（兵書）⑤数術略（天文書・暦譜・算術書・占書・人相書）⑥方技略（医書・房中書・仙術書）。

六という数で学問を統一する劉歆の意思は『漢書』芸文志に保存され、その後の中国の学問分類法の規範となった。

このように、劉歆が生きた紀元0年前後の前漢末から王莽の新王朝にかけての時代に、律暦思想はピークに達した。音律と暦の結合を軸に、度量衡から学術、道德の一切を含む宇宙の森羅万象の関係を数の整合性から説明する半ば合理であり、半ば呪術でもある数秘術的世界観が全面開花したのである。

漢代律暦思想の集約点である『漢書』律暦志の文章には、宇宙論的、普遍的な意味を付与された三、五、六、九、十二、二十四、二十八、八十一など無数の数がちりばめられている。それぞれの数の数術的根拠は絡み合い相互に入り組んで、もはや音律か天文暦法かに還元できるものではない。このような数術の在り方自体が、天地宇宙を万物が繋がり感応し合う相互依存（インター・ビーイング）の関係として捉えた古代的想像力の中国的形態だったのである。

『黄帝内経』の名前が、歴史上、初めて姿を現したのは、このような時代であった。上に述べた劉歆編纂の『七略』の「方技略」冒頭に、「『黄帝内経』十八卷、『外経』三十九卷」とある。『七略』には、ほかにも「黄帝」を冠した多くの書名が記録され、この医書が一群の「黄帝書」と関連するものであることを強く印象づけている。

この医書と数術に彩られた律暦思想家、劉歆が生きた時代との関連から

見えてくる『黄帝内経』成立史とは何か。次回はそれに触れつつ、現存の『素問』『靈枢』を戦国～漢代の黄老思想の文脈から捉え直そうとしたこの連載を総括することにしよう。

ツイート 1

★この記事に対するご意見やご感想をお寄せください»» [Click Here!](#)

HOME

HUMAN WORLD
ヒューマンワールド

[書籍](#) | [DVD](#) | [CD-R](#) | [セミナー](#) | [求人天国](#)

[株式会社 ヒューマンワールド](#)

東京都西東京市田無町7-18-4 TEL.042-444-3678 FAX.042-462-1231

Copyright(c) Human World Co.,Ltd. All rights reserved.